



## MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

薬学部 教授

まつもと かずゆき  
松元 一明

# その風邪に抗菌薬は必要ですか？

1920年代にアレクサンダー・フレミングがペニシリンを発見し1940年代に実用化され、それ以降数多くの抗菌薬が発売されてきました。それまで死因

の上位を占めていた感染症は治療ができればなくなり、加えて公衆衛生の改善、ワクチンの普及もあり、感染症の克服は

間近に迫っているかのようでした。しかし、病気を引き起こす細菌は抗菌薬が効

かないように体質を変えて生き延びてきました。これが薬剤耐性菌です。薬剤耐性菌は抗菌薬を不適切に使用(乱用など)

することで出現しやすくなります。一方で、新たな抗菌薬の開発は停滞しており、

新薬の発売はあまり期待できません。今後、耐性菌に対して有効な抗菌薬が存在

しなくなることが心配されています。抗菌薬の不適切な使用が続く何も対策が講

じられなければ、世界において薬剤耐性

菌による年間死者数は現在の70万人から2050年には1000万人になると予想されています。

わが国では2016年4月に薬剤耐性対策アクションプランが発表されました。

抗菌薬に対する細菌の耐性率を低下させるために、2020年までに抗菌薬の使用量を2013年の使用量の3分の2に

減らすことを目標としています。抗菌薬の有効性を維持し、その寿命を延ばすた

めには抗菌薬を適正に使用することが重要です。まず抗菌薬は必要な時だけ使用

しましょう。例えば、風邪をひいたら病院にかかり、抗菌薬をもらい服用する。

この一連の流れは、子供の頃から経験していることだと思えます。しかし、風邪

の原因はほとんどがウイルスです。抗菌薬はウイルスに効果がありません。もし

抗菌薬を服用して風邪が治ったのであれば、それは自分の力で治したか、もしくは近親者による愛情たっぷりの看病の賜物です。さらに、抗菌薬は下痢やアレルギー

症状など副作用を発現する可能性があります。すなわち、抗菌薬の使用により薬剤耐性菌や副作用が発現する危険を冒しながら、ウイルスによる風邪に効果

のない抗菌薬を使用することは、まさに抗菌薬の不適切使用です。人は成人する

までに60〜70回程度風邪をひくと言われています。感染症にかかったら症状を医師に詳しく伝え、抗菌薬は必要な時だけ

使用しましょう。そして、まずは感染症にかからないように、日頃から手洗いを

し、咳エチケット(マスクの着用など)を心がけることが大切です。子供や孫の

時代そのまた先まで抗菌薬の寿命を延ばせるように、抗菌薬の使い方を見直して

みませんか。